

堂の前遺跡

昭和53・54年度調査略報

1980

山形県教育委員会

堂の前遺跡

昭和53・54年度調査略報

昭和55年3月

序

山形県を縦貫して日本海に注ぐ、母なる最上川の河口に形成された庄内平野は、肥沃な穀倉地帯としてとくに有名であります。

庄内平野の中でも、酒田市から八幡町にかけての一帯は、史跡「城輪柵」をはじめとして、平安時代頃の遺跡がとくに密集しているところであります。

堂の前遺跡は、昭和49年以来発掘調査を実施いたしておりますが、その結果、篠風の地業を伴なう基壇跡をはじめとして、大規模な建物群が発見されております。

遺跡の性格はまだわかっておりませんが、おそらくは歴史的にも重要な施設と思われ、昭和54年10月には国の史跡指定も受けております。

本書は、山形県教育委員会が昭和53・54年度に第6～8次調査として実施した、庄内農村基盤総合整備パイロット事業に係る緊急調査の概要をとりまとめたものであります。

本書によって山形県の歴史の解明に一石を投ずることができれば、望外の喜びとするところであります。

終りに、調査にあたって多大の御協力と御指導を賜わった関係各位、また地元の土地所有者・発掘作業に従事された方々に対し深甚なる謝意を表します。

昭和55年3月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

例　　言

- 1 本書は、山形県教育委員会が昭和53・54年度に実施した、庄内農村基盤総合整備パイロット事業に係る、堂の前遺跡の緊急発掘調査の略報である。
- 2 発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、八幡町教育委員会及び関係諸機関の協力を得て行なわれた。
- 3 本書では、堂の前遺跡の昭和50・51年度の調査略報と同様、出土遺物に関しては後日まとめて報告することとし、調査経過や発見遺構についての概略を述べるにとどめた。
- 4 挿図中の方位は真北を示す。
- 5 文中で尺を用いた場合、唐尺（1尺=30cm）を使用した。
- 6 本書の作成にあたっては、佐々木洋治が総括し、編集を名和達朗、執筆を尾形興典、写真撮影及び現像・焼付けを大類　誠がそれぞれ担当し、トレース作業は木村陽子がこれを補助した。

目 次

I 調査の経緯	1
II 第6次調査	
調査経過	4
遺構	6
まとめ	8
III 第7次調査	
調査経過	9
遺構	10
まとめ	14
IV 第8次調査	
調査経過	15
遺構	16
まとめ	28

挿図目次

第1図 堂の前遺跡環境図	2	図版4 第7次調査 北地区全景
第2図 第6・7・8次調査地区	3	図版5 第7次調査 北地区遺構検出状況
第3図 第6次調査発見遺構概念図	5	S B 265根固め石遺存状況
第4図 S X 242性格不明大溝跡 部分図	7	図版6 第8次調査 S D 268・271・272・273・276 溝跡発掘前・後状況
第5図 第7次調査北地区遺構図	11	S D 268溝跡矢板遺存状況
第6図 S B 265門跡	13	図版7 第8次調査 S D 268溝跡 N×143区付近 同溝跡北壁土層断面
第7図 第1～8次調査発見 主要遺構略図	17	図版8 第8次調査 S D 268溝跡 N W 121区付近 同溝跡北壁土層断面
第8図 S D 268溝跡	19	図版9 第8次調査 S D 268溝跡 N U 109区付近 S F 274畦状遺構 IX D 79区付近
第9図 S D 268溝跡	19	図版10 第8次調査 S E 266井戸跡、S D 267溝跡 S D 267溝跡土層断面
第10図 S D 268・271・272 273・276溝跡	19	図版11 第8次調査 S E 266井戸跡 同井戸跡発掘状況
第11図 S D 267溝跡	21	図版12 第8次調査 S B 270礎石建物跡地区調査状況
第12図 S F 274畦状遺構	24	
第13図 S E 266井戸跡	25	
第14図 S B 270礎石建物跡 プラン確認図	26	
第15図 S B 270間取り想定模式図	27	

図版目次

図版1 第6次調査 出土木筒	
図版2 第6次調査 木筒出土状況 第8次調査 石帶出土状況及 出土石帶	
図版3 第6次調査 S X 242性格不明大溝跡 同溝跡IX K ラインの土層断面	
図版4 第7次調査 北地区全景	
図版5 第7次調査 北地区遺構検出状況	
S B 265根固め石遺存状況	
図版6 第8次調査 S D 268・271・272・273・276 溝跡発掘前・後状況	
S D 268溝跡矢板遺存状況	
図版7 第8次調査 S D 268溝跡 N×143区付近 同溝跡北壁土層断面	
図版8 第8次調査 S D 268溝跡 N W 121区付近 同溝跡北壁土層断面	
図版9 第8次調査 S D 268溝跡 N U 109区付近 S F 274畦状遺構 IX D 79区付近	
図版10 第8次調査 S E 266井戸跡、S D 267溝跡 S D 267溝跡土層断面	
図版11 第8次調査 S E 266井戸跡 同井戸跡発掘状況	
図版12 第8次調査 S B 270礎石建物跡地区調査状況	

I 調査の経緯

堂の前遺跡は、八幡町法連寺字堂の前にある。標高約15m、日向川・荒瀬川の合流点に近く、荒瀬川等によって形成された河間低地上に位置し、一帯は現在水田となっている。

この付近には、平安時代初めに置かれた出羽国府跡と考えられる、史跡「城輪柵跡」、さらには、仁和3（887）年に城輪の地から「高敞之地」に「遷造」された出羽国府跡と考えられている八森遺跡をはじめとして、本遺跡と同時期のものと考えられる樋掛遺跡や後田遺跡、官衙跡ではないかと考えられている上ノ田遺跡、所在時期に疑問はあるものの、六所神社、古四王神社、八幡神社など、通常国府に関連して在るといわれる古社など、平安時代の出羽国中枢域を考えるうえで貴重な遺跡や古址が数多く分布している。また、八幡神社から西にのびる市条集落は、古くは「一條」と書き、条里制の起点を思わせるが、事実、市条集落を南北に二分して東西に走る道路は、城輪柵跡の東西軸線の延長上に重なっている。さらに、市条から出羽丘陵の西麓沿いに南にのびる道路上、南平沢の集落には「大道東」という小字名も残っており、先の「一條」と相俟ってこの地域に条里制が施行されていたことを示唆している。

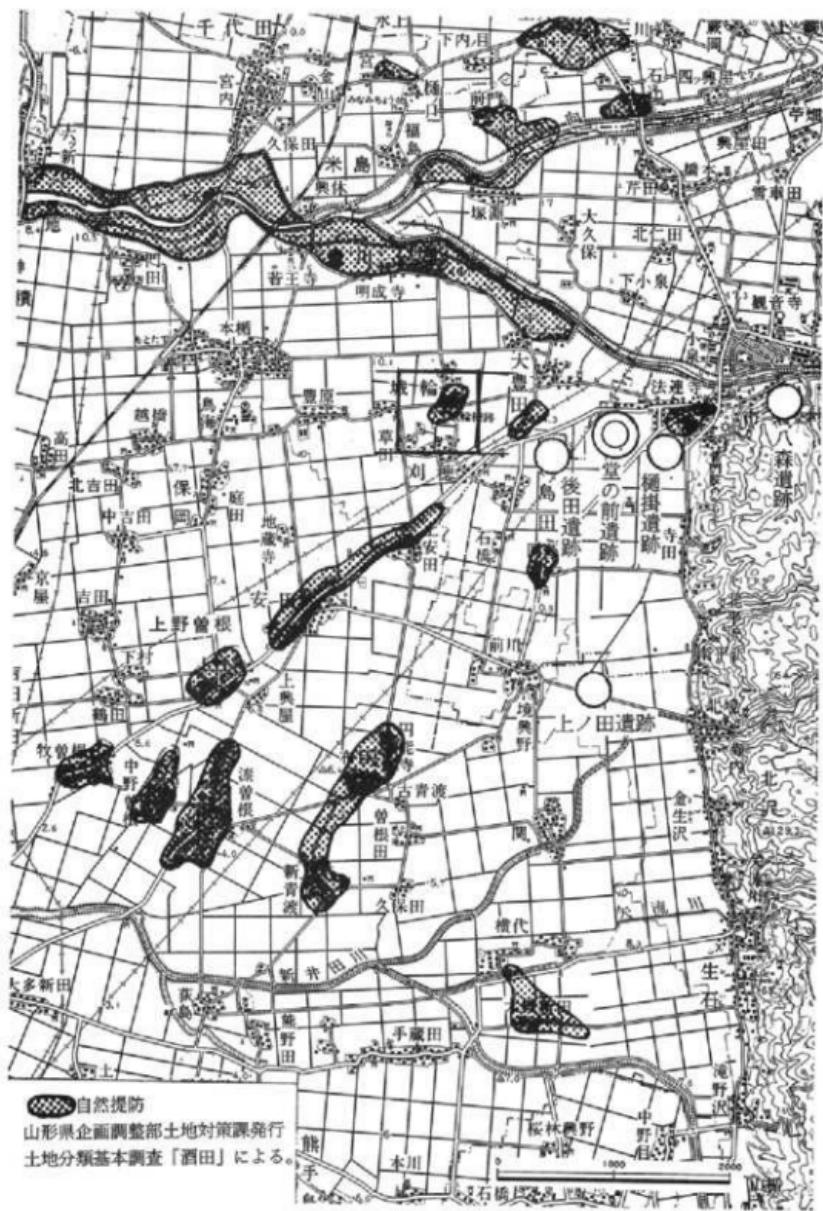
堂の前遺跡は、以前から知られてはいたが、昭和48年の予備調査によってその価値が、再認識されるに至った。県教育委員会では、東北電力株式会社の送電塔架け替え計画や、庄内農村基盤総合整備パイロット事業（以下総バ事業と略す）などの諸開発に対して、遺跡の保護対策をたてるために、遺跡の範囲確認を目的として3ヵ年5次にわたる発掘調査を実施した。これらの調査により、筏風の地業を伴なった基壇を主として、掘立柱建物跡や溝跡、矢板列跡など数多くの遺構が発見された。

さらに山形県教育委員会では、昭和53年から実施された当該地区の総バ事業に対して、2ヵ年3次にわたる緊急発掘調査を実施した。調査は、圃場整備事業の計画にそって、新設の農道・水路を境として遺跡の推定範囲を南北に4分し、最南部のD地区を第6次調査、C地区を第7次調査とし、北半のA・B地区を第8次調査として行なった。

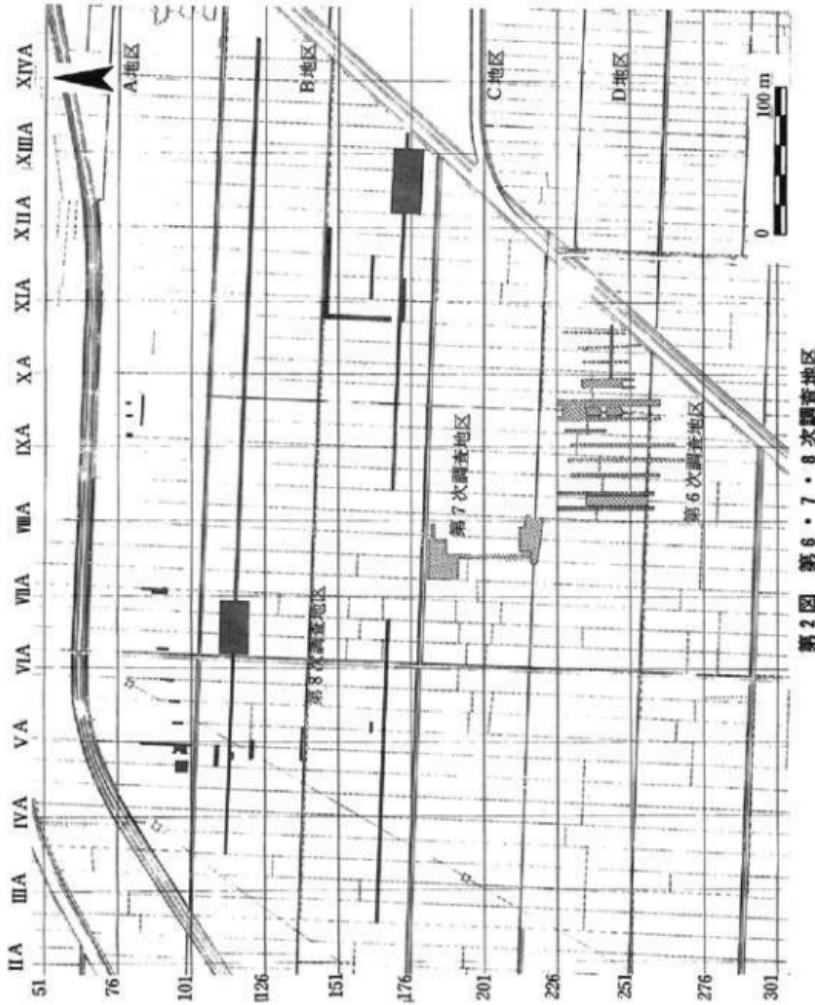
第6次調査では、旧河川跡を再利用した大溝が発見され、多量の土器や木質遺物などが出土した。特に3点の「山崩急々如律令」と墨書きされた木簡の出土は注目される。

第7次調査では、第5次調査地区の南側に、門跡と考えられる掘立柱建物跡が2ヵ所で発見された。

第8次調査では、調査区の西及び北に外画線と考えられる溝が、また調査区の北の方では礎石建物跡が発見され、さらには第6次調査で発見された大溝が、外画線の外を東北にのびるらしいことも把握された。



これら、計8次にわたる発掘調査によって、遺跡の詳細が徐々に明らかになりつつあり、昭和53年には、基壇跡を中心とする4200m²の地域が、国の文化財保護審議会から史跡指定の答申を受け、昭和54年10月23日に国指定の告示が為されたことを付記しておく。



第2図 第6・7・8次調査地区

II 第6次調査

調査期間 昭和53年8月22日～同年9月21日（20日間）
調査地区 D地区
発掘面積 762m²
調査者 佐藤庄一、尾形與典、手塚 孝

調査経過

第6次調査は、遺跡の最南部であるD地区のうち、VII A～X R-226～250区付近を対象にしたもので、総合事業による新設排水路の南側にあたる。

8月22日、現場設営を終え、調査区の試掘を行なった。調査区はすでに新圃場の荒整地が終っていたので、試掘や粗掘りは、この新圃場を単位として行なった。まず圃場1枚につき3ヵ所の割合で、1×1mの試掘孔を穿った。翌23日、新圃場1枚おきに、試掘の成果をもとにブルドーザーで、地山であるシルト層直上までをメクった。24日から座標を設定し、以後は座標によるグリッドにもとづいて調査区を設けることにした。

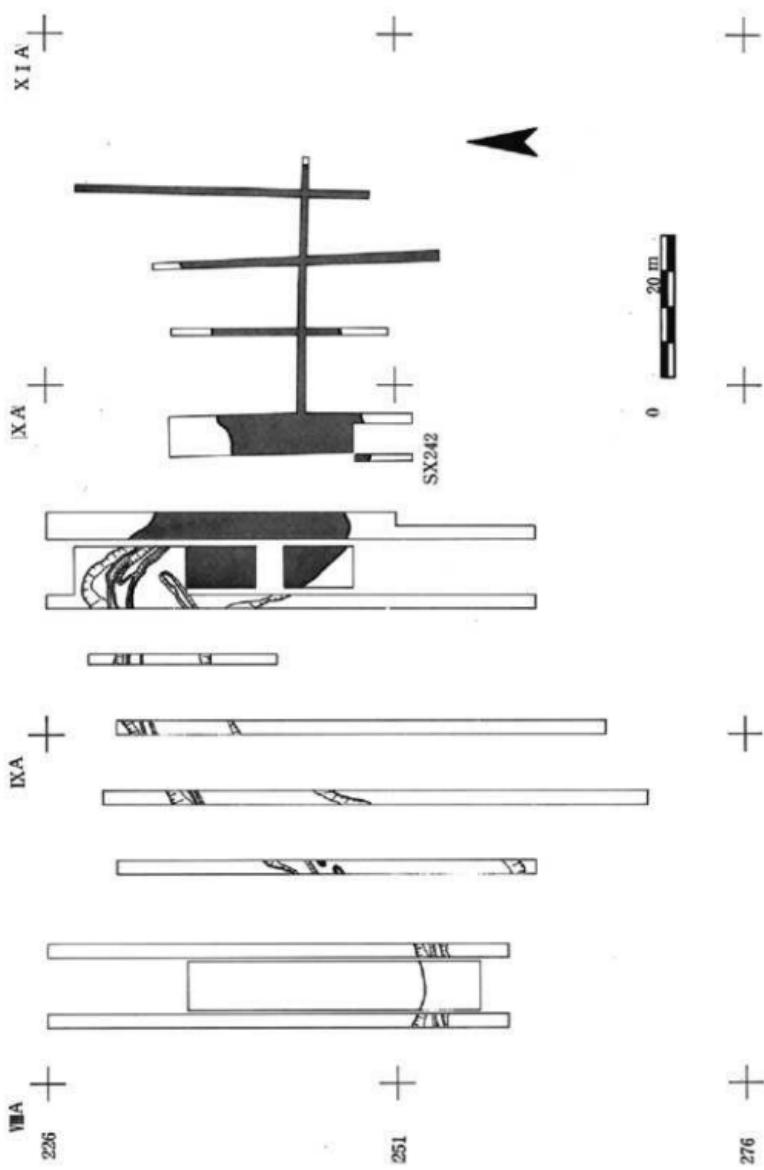
最初、VII E 226区付近を調査していたが、遺構が発見できないので、このトレンチを南に延長すると共に、VII J ラインにもトレンチを設定し、その両者の中间をも調査することにした。

VII E・J ライントレンチの南端部で大溝の北岸部を発見した。一方、IX J ラインにもトレンチを設定したところ、IX J 228付近で大溝を発見し、南岸部をつきとめたところ、20～30mの幅をもつことがわかった。当初はこれをVII E～J-252地区の大溝とは別のものと考えていたが、その後、この両者の間を、トレンチを設けて追っていくうちに、両者は同一のものであることが判ってきたので、これをまとめ、後にS X 242という遺構番号を冠した。

このS X 242は、河川跡と考えていたが、調査をすすめていくうちに、溝の北岸に沿って堰堤状の高まり（E F 243）があることがわかり、さらにこれと同じ様な規模で、流れをセキとめる様な形で遺存する別の高まり（E F 244）が確認された。そして大溝北岸とE F 243の間は、ある時期流れとして使用されていたことがとらえられた。

調査の結果、S X 242は、旧河川を部分的に再利用したものであろうことが推定されたが、精査個所が部分的なので、どの様な使われ方をしたのかについては、詳しくわかっていない。9月19日から平板による全体測量を行ない、9月21日には20日間にわたる調査を終え、現場を撤収した。

第3図 第6次調査発見遺構概念図



遺 構

第6次調査において発見され精査された遺構は、S X242性格不明大溝跡のみである。以下にその概略を述べる。

S X242性格不明大溝跡（第3・4図）

遺跡の最南部を蛇行しながら東西にのびる大溝で、幅は地点によって差があるが狭いところで約13m、広いところで20mを測り、屈曲部では28mに達する。

深さは、溝の北岸上場から80~110cmを測る。底部は概ね平坦で、両端でゆるやかに立ちあがる。断面図（Ⅲ K ライン）では、北岸は一扭27度位の傾斜で立ち上り、途中でゆるくなつた後31度位の傾斜で上場までのびている。一方南岸は239区あたりから約2度の傾斜で徐々に底があがってゆき、242区で一扭34度位の傾斜で立ち上り、間もなく今度は8度程の緩い傾斜になって上場に接している。

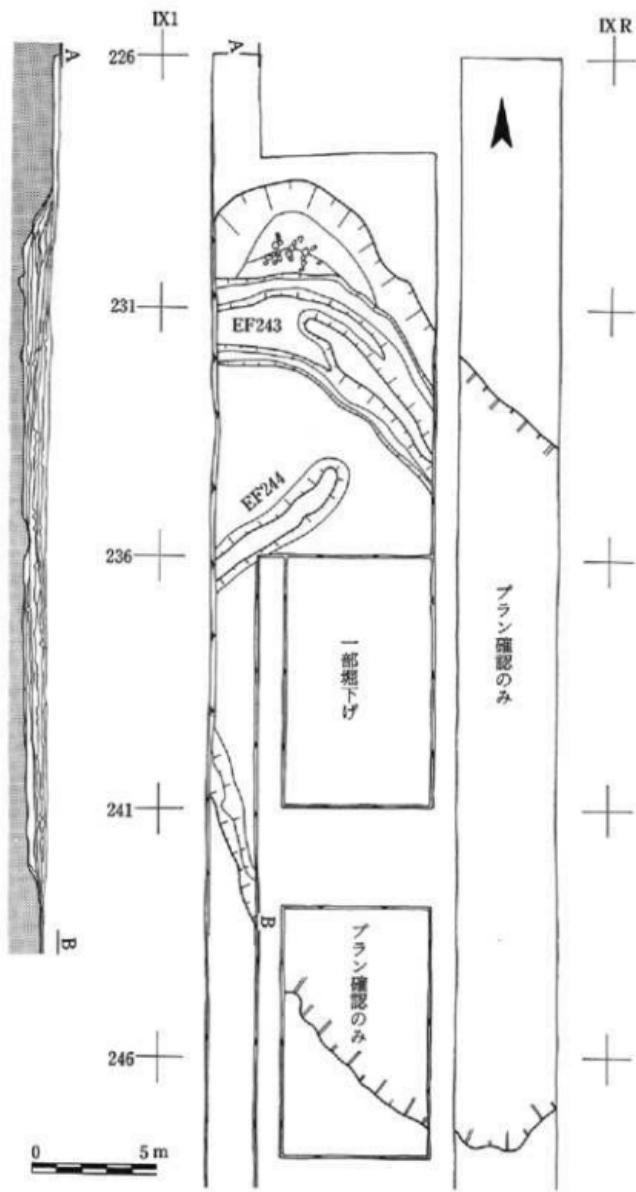
溝の中には、E F243・E F244と付番された、人工的なものと考えられる堰堤状の遺構がある。

E F243は、大溝の北岸に沿って走る堰堤状の高まりで、基底部幅約2m、高さ50cm内外の、断面半円形ないし上部が丸くなった台形を呈する。他の地点では見られなかつたが拡張区（IX J~N-228~236区）では、両側に側溝をもつてゐることが観察された。側溝の測定は堰堤状遺構の北と南では異なり、北側では幅0.8~1.3m、深さは20~30cmを測り、南側では幅0.4~0.7m、深さ概ね10cmを測る。埋積土は両方とも地山と同じ青灰色シルトであり、地山より幾分砂気が多い。埋積土の中からは赤色土器や須恵器の、主に杯が何点か出土している。この側溝は、砂気の多い埋積土からみて水が流れていしたものと思われる。他の地点で見られなかつたのは、覆土が地山と同じなので、見過したものかとも思われる。

E F244は、E F243と異なり、大溝をセキとめる様な形で遺存する堰堤状遺構である。南岸部との関係は確認していないが、おそらくは南岸部に取り付いてゐるものと思われる。測定は、基底部で幅1.4~1.8m、高さは20~40cmを測る。軸方向は真北に対して約37度東に偏る。検出した状況では、E F243とは約2.5m程離れていたが、E F 243或はその南側の側溝を精査した範囲では、この両者が接していたとは考えられず、おそらくはもともと離れていたものと思われる。

E F243とE F244との時間的な関係であるが、これを積極的に証明する資料は得られなかつたが、断面図から見て同時期かあるいは少なくともそれほど隔たらない時間内に両者が存在したものと思われる。

S X242の覆土は、6層にわかれ、大別すると3層、細別すると15層になる。



第4図 S X 242性格不明大溝部分図

基本的には1層から4層までが泥炭層で、これらが、有機質物の含み具合、腐蝕の進行状況、色調、土質などによって4分される。5層は青黄褐色の粘質土、最下層の6層は、青灰褐色のシルトである。2層から4層までは、主に北岸部で若干土色等を異にしており、2層が2つに、3層が4つに、4層が3つに細分される。

覆土の観察は、EF243堰堤状構造の高まりが途切れたところで行なうという結果になつたので、この土層図からは、EF244との関係を積極的に抱えることはできないが、最下層の6層が割合平坦に埋まっているところから、この地点ではEF243の高まりはもともとなかったか、或は在ったとしても6層が堆積するころには既に無くなっていたものと思われるし、その直上の5層がEF244の高まりを覆っているところから、EF243とEF244は、同時期のものか若しくは異なる時期としても近接した時期に使用されたものと考えられる。

遺物は殆んど全ての層から出土している。土器が主であるが、覆土が泥炭質であることから有機質遺物の腐蝕も少なく、曲物や段皿、下駄、火鑓臼などの木製品も良好な状態で出土している。中でも「山脣急々如律令」と墨書きされた3点の木簡が3層から出土したことは、本遺跡の性格を考える上で大きな示唆を与えてくれるものと思われる。

ま　と　め

巻頭の第1図に、この近隣に残る自然堤防の痕跡を載せておいたが、これによると荒瀬川は、市条の八幡神社付近（谷口）を支点にしてかなり広範囲に流路を変えており、その翻々とした流路のひとつとして、堂の前遺跡の南東部から岡島田、円能寺、新青渡の各集落を結ぶルートを想定できそうである。

SX242性格不明大溝は、この様に翻々と変わった荒瀬川の、或る時期の流路と関連づけて考えられそうである。旧河川そのものであるという確証は得られなかったが、平面からは、人工のものとは考えにくく、現在のところは旧河川跡と想定しておきたい。

EF243・244などから、旧河川跡を再利用したものであろうと思われるが、どの様な使われ方をしたのかについては、向後の検討を俟ちたい。

堂の前遺跡は、性格は不明であるが、少なくとも古代の公的施設であることが考えられており、その様な施設がその四至の中にSX242の様な流路を取り込むということは考えにくく、従ってSX242の北側に四至の南辺が設定されたものと思われる。

III 第7次調査

調査期間	昭和53年10月16日～同年9月22日（24日間）
調査地区	C地区
発掘面積	897m ²
調査者	佐藤庄一、尾形與典、手塚 孝、佐藤義信

調査経過

第7次調査は、第6次調査地区の北側で、昭和54年度着工予定地域（C地区）のうち、丸藤一幸氏所有の水田5枚、5041m²を対象にしたもので、このうち排土置き場用地を除く3053m²を調査区とし、基壇跡地区の南側の状況把握を調査の主目的とした。

調査はまず、ブルドーザーによる調査区の耕土剥ぎから始まった。耕土と盤土を、混ざらないように東西に振り分け、地山であるシルト層の直上まで剥ぎ取った。この時点で、調査区の北部に河原石の密集しているところが発見された（10月16日）。翌17日にトランシットで座標設定を行ない、トレンチを設定した。

16日の段階で発見された河原石の密集地は、面整理を行なった結果夫々溝（SD 246）と掘立柱の根固め石（SB 250）と判明し、両者を追うべくこの付近を拡張することにした。一方、調査区の南端部をボーリング探査したところ、SB 250と同じ様な状況を呈する根固め石（SB 265）が発見された（10月18日）。

調査区を南北に縦断するトレンチを設けて調査したが、遺構が発見されなかつたので、調査期間の関係から北地区と南地区とに調査区を限定することにした（10月19日）。

北地区は、調査が進むにつれてSD 246とSB 250が同一のものと考えられる様になり、SB 250は門跡、SD 246はその雨落ち溝ではないかと考えられた（10月24日）。この後、溝のプラン検出、掘り下げを行ない、11月8日には写真撮影を行ない、同9日から実測にかかった。またSD 246の北側に、略東西に走る矢板列（SA 245）が発見された（11月6日）。SA 245は西の方が検出しにくく、サブトレンチを入れてみたが、ついに一部分しか確認できなかつた。

南地区では、SB 265の根固め石がさらに発見され、ボーリング探査によってこれらの下には直径50cm程の柱根が遺存することが判明した（10月25日）。そこでこの地区を大規模に拡張すべく、バックホーによって粗剥ぎを行ない（11月6日）調査を行なつたが、結局遺構は何ら発見できず、期間の関係でこれ以上の追求を断念した。

両地区は11月21日までに記録を終え、同日現場を撤収した。

遺構

第7次調査で発見された遺構は、北地区では溝跡3、矢板列1、掘立柱列1、門跡1、南地区では門跡1などである。以下にその概略を記述する。

S D246溝跡（第5図）

北地区で発見された溝である。東西にのびており、方向は真東から概ね11度北に偏る。溝は2段になっており、幅は外側が1.9~2.4m、内側が1.4~1.6mを測る。深さは外側の浅い方が約4cm、内側の深い方が約8cmを測る。この2者は2時期の重複と考えられたが、覆土から同一時期のものと判明した。

溝の中央から南寄りに河原石が密集していることが確認され、遺存状況から敷きつめたものであろうと判断された。栗石はVII N183区辺りで一担途切れ、VII O・P182区辺りから疎らに南東方向に散在している。一方、溝はそのまま東にのびて行き、VII Qライン付近で消えてしまうが、VII Oラインから東側はグライ化が激しく、検出が困難で充分に追求出来なかった。栗石の遺存状況から考えると、VII O 183区あたりから南に折れる可能性も考えられる。なお、溝中（VII H184区）から赤色土器が出土している。

溝の中の栗石と、後述するSB250門跡の根固め石は、溝の南上場付近でつながっており、SB250に伴なうものと考えられた。或はSB250の雨落ち溝かとも考えられる。

S D247溝跡（第5図）

北地区的西側で発見された、素掘りの溝で、幅約30cm、深さ5~6cmを測る。方向は、真北から約20度西に偏る。

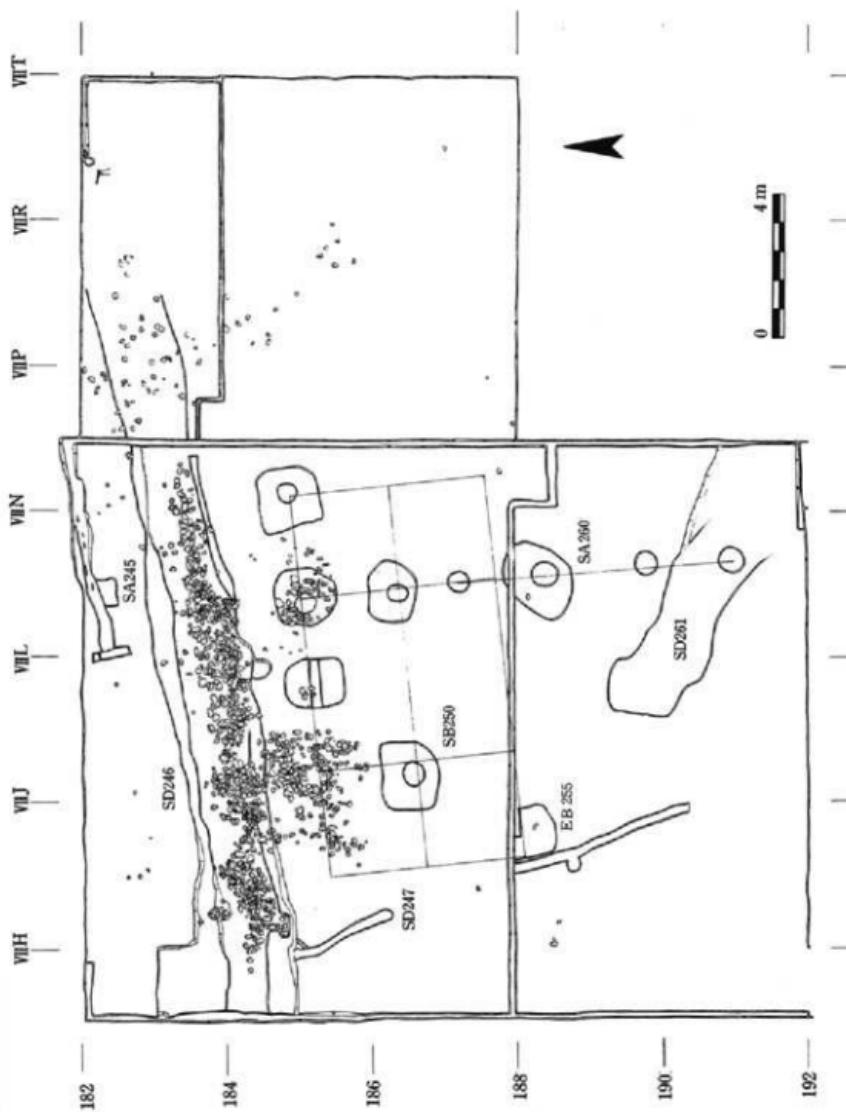
S D247はVII G184区あたりでS D246溝跡を切っており、切り合い点の北で間もなくわからなくなる。VII H186区で不明確になり、VII I 188区から再び確認され、VII I 190区付近で不明确になり、消える。或はEB255の南西隅の柱をも切っている可能性もある。

S D261溝跡（第5図）

北地区的南寄りに発見された溝であるが、覆土はグライ化が激しく、良好な状態では検出できなかった。確認した範囲では概ね真西から25.5度北に偏り、2時期にわたる重複を考えられそうであるが新旧関係は把握できなかった。

幅約1.6m、深さ約5cmを測り、VII M190区付近でSA260掘立柱列に切られる。

第5圖 第7次調查北地區地圖



S A 245矢板列（第5図）

北地区の最北端に発見された矢板列で、方向は真東から約11度北に偏る。

幅約30cm、深さ約20cmの素掘りの溝の略中央部に矢板を並置したもので、矢板は幅10~30cm、厚さは1cm内外を測る。矢板には溝の方向、つまり東西方向をむくものと、南北方向をむくものとがある。殆んどは東西方向を指している。また、東西方向に在る矢板は、一直線には並ばず、南北に振れているが夫々の方向は概ね一致している。

検出したのは約4~5m程度の範囲である。覆土はグライ化が著しく東はⅧ〇ライン、西はⅦレーライン辺りでプランが不明確になり、とくに西ではサブトレンチを切って掘方を確認しようとしたが、覆土が地山に同化しているので遂に検出できなかった。

矢板列はこれまで本遺跡でもいくつか発見されているが、現在のところ夫々がどの様な関連をもつのかは詳しくわかっていない。これについては向後の検討に俟ちたい。

S A 260掘立柱列（第5図）

北地区のほぼ中央南寄りに発見された掘立柱列で、S B 250と重複している。

直径約60cm内外の掘立柱が4本発見されており、うち1例は掘方をもつが、他では掘方は確認できなかった。柱列は真北から約4度30分西に偏り、柱間は255cm(8.5尺)の等間で、更に南にのびる可能性もある。

柱列の性格、時期及びS B 250との時間的関係等は不明である。

S B 250門跡（第5図）

北地区の略中央部で発見された掘立柱建物跡で、八脚門と推定したものである。

検出された柱は、北側の控え柱3本、親柱2本、南側の控え柱1本の計6本である。北側の控え柱のうち、中央寄りの2本には根固め石と共に柱根も遺っており、北側控え柱の東から2番目の掘方をタチ削ってみたところ、埋め土は青灰色シルトで、栗石と共に撗き込んでいた。それによると直径は約65cmを測る。埋め土と地山が同じ青灰色シルトであるため、検出は困難をきわめた。もう一方の遺存柱根は、上部を栗石が覆っているため、柱根を露呈させることはせず、ボーリング探査による確認にとどめた。この柱の根固め石がS D 246の方に流れ込んでいるがその境界が明瞭でなく、両者のレベル差も境界部では認められなかったことから、両者を同時期のものと考えた。

南西隅の掘方はプランが不明確であり、或はもう少し抜がれることも考えられる。そうなると、先述した様にS D 247溝跡と重複する様になる。

門跡の棟通りは真東から約6度30分北に偏る。柱間は東西が285cm+480cm+285cm=1050

cm (9.5尺 + 16尺 + 9.5尺 = 35尺) となり、南北は270cm + 270cm = 540cm (9尺 + 9尺 = 18尺) となる。

参考までに南北辺長と東西辺長の比率を計算すると 1 : 1.94 となる。

S B265門跡（第6図）

南地区で発見された掘立柱建築物跡である。

遺構面に河原石（栗石）がたまっているところが発見され、ポーリング探査によって栗石の下に柱根が遺存することが判った。

ポーリング探査によって、柱根の直径は、概ね50cm前後であろうと推定された。

確認された柱根は3本で、真北に対して西におよそ11°前後であろうと推定された。

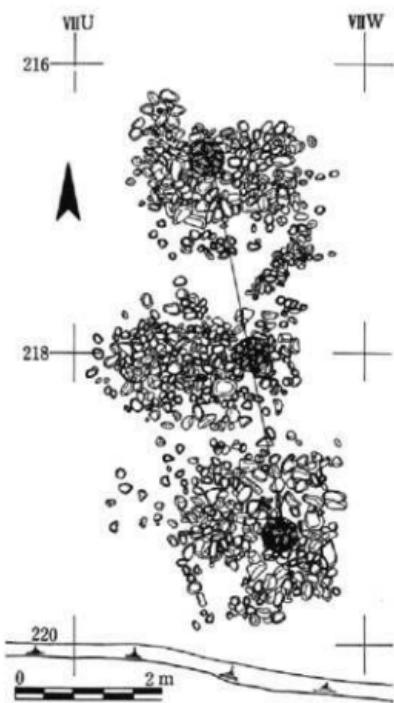
確認された柱根は3本で、真北に対して西におよそ11°前後の偏りを示す。

発見された3本の柱根（根固め石）を中心周囲を拡張したが、根固め石は勿論、掘方をも確認するには至らなかった。

調査段階で、S B 250 門跡との類似性から S B 265 をも門跡と想定した。

門跡とすれば確認された3本の掘立柱はどこに位置するかが問題になるが、この後の第8次調査でおよその想定が出来た四至にハメ込んでみたところ、どの様な操作をしても、東西辺の中央には位置しなかった。

これだけの資料を以て門跡の構成を復原するのは、屋上屋を架す危険を伴なうが、第7図には一応発見された柱跡を門の東端に想定しておいた。



第6図 S B265門跡

ま　と　め

第7次調査では、調査区の南北両部分で建物跡が発見され、いずれも門跡と考えられた。とくにSB250は北側に雨落ち溝を伴なうものと推定された。

先に報告されたSB003建物跡からSB250門跡までは約43m（約143尺）。1町を400尺とすると概ね0.3町となる。

SB250とSB265両門跡は棟通りの方向が異なり、時期を異にするのではないかとも思われる所以同一レベルで比較することはできないが、参考までに両者の距離を計測すると、約66m（220尺）となり、0.55町で概ね半町と見做せる。

両門跡共、棟通りに取り付く施設を発見することが出来なかった。

SA245矢板列とSB250門跡との時間的な関係は積極的には把えられなかつたが、第5次調査区で発見されたSA184矢板列やSA128矢板列と似た様相を示し、方向も略同様であるところからこれら矢板列と同じ時期のものと推定される。とくにSA184は、SB003やSB002建物跡の検出面であるIII b面よりも下から検出されており、一時期古いものと考えられる。

IV 第8次調査

調査期間	昭和54年5月29日～同年8月10日(52日間)
調査地区	A・B地区
発掘面積	831m ²
調査者	尾形與典、大類誠

調査経過

第6・7次調査で遺跡の推定範囲の南半部を終了しているので、第8次調査は残りの北半部、A・B地区的約113,000m²を対象にしたが、調査期間との関係もあり、最北部のA地区は主に排水路敷設予定地、B地区は主に農道敷設予定地を調査対象とした。なお事業計画によると、夫々の幅員は、水路は250cm、道路は480cmとなっている由。

調査にあたってまず道路及び水路の敷設予定地に沿って、バックホーで1.5mのトレンチを掘削し、粗掘の終った6月4日からトレンチの面整理にかかった。今回の調査は工事図面に従ってトレンチを設定しているので、当初は座標を用いず、現行圖場1枚を単位として遺物を取り上げた。そして調査の便宜上水路敷に設定したトレンチをA区、道路敷に設定したトレンチをB区と通称した。

B区の西側で矢板列、溝などが発見され、次いでA区の西側でも溝が発見されたので、その間にトレンチを設定して調査したところ、この両者は同一の溝(S D268)であることが判った。S D268の方向は、基壇跡地区で検出されている遺構の方位と概ね合致することから、外画線ではないかと考えられた(6月14日)。

一方、B区の東側で泥炭層を覆土にもつ大溝や遺物の密集地域が発見された。この大溝は幅が約10m程度であるが、第6次調査で発見されたSX242と同一のものであろうことが推定された(6月27日)が、調査期間やその後の工事のことなどを考え合わせて、プランを確認するにとどめた。

A区の北側に、略東西にのびる溝(S D267)が発見された(7月5日)。この溝はS D268よりも幅が広く、覆土も上層では異なっているため、両者を短絡するのはどうかと考えたが、一応方向も合うのでS D268と対にして把えることにし、北辺の外画線と想定した。

S D267の東西端をとらえようとしたが思わしい結果は得られず、東端部では溝のかわりに東西にのびる畦状の遺構(S F274)が発見された(7月13日)。

A区の中央寄りに河原石が遺存しているところが見られたので、一部拡張したところ、礎石が発見された。この礎石を中心にボーリング探査を行なったところ、約3m間隔で栗

石が遺存することが判明したので、この地区を重機で拡張することにした（7月10日）。この礎石建物跡（S B270）は、当初梁行3間と考えていたが、後に4間であることが判明した。

S D267を調査中、すぐ南に井戸跡（S E266）が発見された（7月18日）。井戸跡は、はじめ土塙跡と思われていたものが、掘り下げていくうちに井戸枠が検出され、井戸跡と判明したものである。S E266は途中調査が中断されたりして調査期間に余裕がなくなったため、途中まで掘り下げた段階で記録を行ない（8月9日）、調査を打ちらざるを得なかつた。また、S B270地区も期間の関係で遺構の掘り下げは行なはず、プランを確認した段階で写真撮影（8月8日）を行ない、実測・レベルング（8月9・10日）して調査を終了した。

昭和53年度から、当文化課の啓蒙事業のひとつとして「県民参加の発掘」を実施しているが、今54年度は堂の前遺跡が実施地となった。そこでB区東端部の遺物密集地域を対象地とし、7月23日には当該地域の表土剥ぎをバックホーで行ない、概ね面整理までを終えて当日を待った。7月31日、「県民参加の発掘」当日は、午前8時30分から受付を開始し、学習や発掘実習を行ない、午後4時に終了した。

発掘によって多量の遺物が発見されたが、中でも石帶（遙方が2点）の出土は注目される。なおこの地区は排水が悪く、一組降雨があると調査区に雨水が充满する。県民参加の発掘が終った後、何度も雨水を汲み出して面整理を試みたが、調査期限がせまって来たので、この地区的調査を断念せざるを得なかつた。

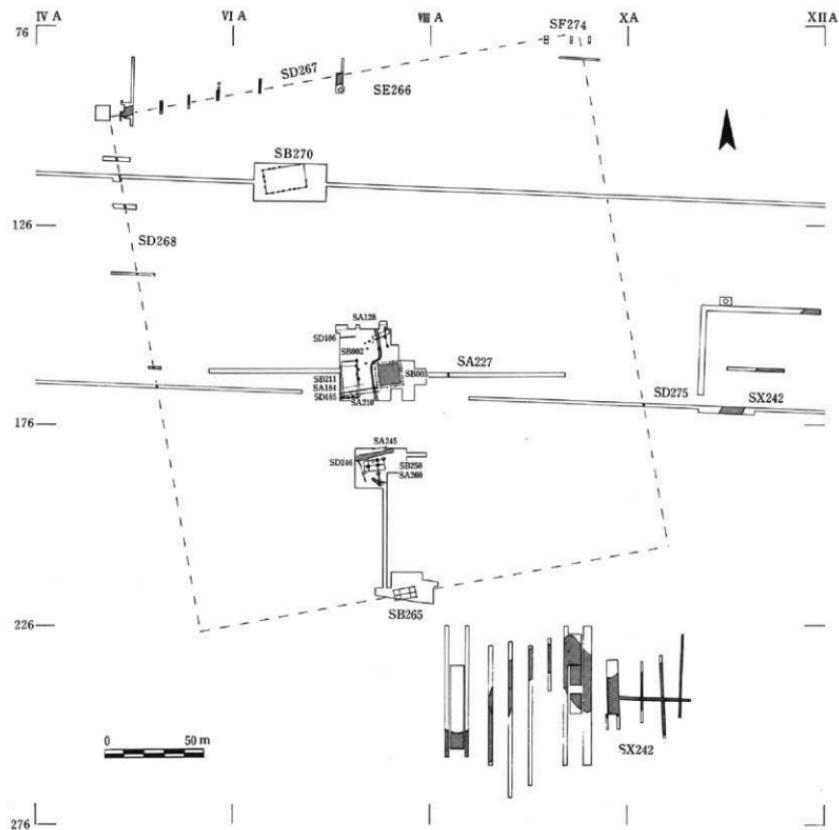
遺構

第8次調査で発見された遺構は、溝跡8、畦状遺構1、井戸跡1、礎石建物跡1などである。以下にその概略を記述する。

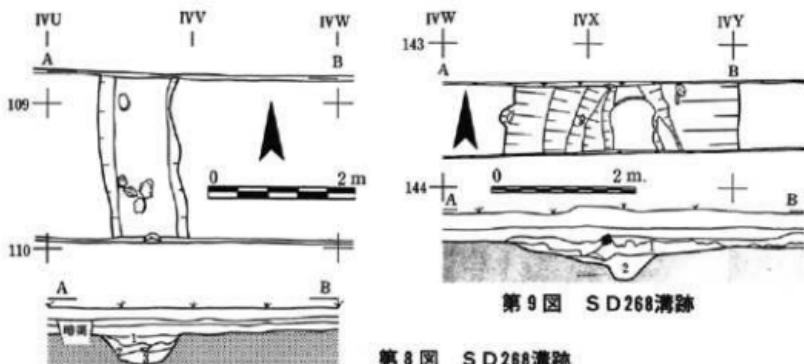
S D266溝跡（第8・9・10図）

農道敷設予定地（B区）の西方に矢板列を含む数本の溝跡が発見され、その北方を追ったところ、1本の溝跡がのびていることがわかつた。方向は真北から西に約10度の偏りを示す。基壇地区で発見されている諸遺構と方向、出土遺物などが同じ様相を示すことからこれを堂の前遺跡の西側を画するものであろうと想定した。

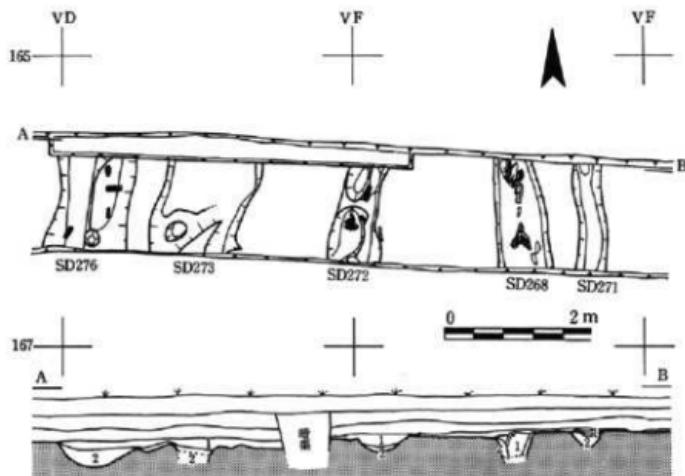
最初に発見された数本の溝跡のうち、矢板列をもつものがS D268と略1直線に並ぶことが判った。この両者は矢板列の有無で異なるが、一線上に並ぶことから同一のものとし、



第7図 第1～8次調査発見主要造構略図



第8図 SD 268溝跡



第10図 SD 268・271・272・273・276溝跡

矢板列の設置は部分的なものと判断し、全体を溝跡と規定した。

このうち次の3地点を選んで略述する。

IVU109区付近（第8図）

素掘りの溝で、溝の幅は約2m、深さは上場から約40cmを測り、概ねU字形を呈する。埋積土は3層ある。1層は暗黄褐色を呈し大粒のカーボンや土器を含み、しまりがある。2層は黄褐色土と青褐色土の混ったもので、大粒のカーボンを含み1層に比べて砂質に富む。断面図には土器（赤色土器杯）がみえているが、他にも多数の土器片が出土している。

3層は青褐色を呈する砂質土でカーボンの細粒を多く含み、ところどころに青灰色シルトのブロックが入りこんでいる。

IV X 143区付近（第9図）

素掘りの溝で、上場で約3.1mを測る。壁面は最初ゆるやかに落ちて来、途中で角度を変えて最底部に達する。ゆるやかな部分は埋没する際の崩れかとも思われるが詳かではない。溝の底部は場所により広さが異なり、30~60cmを測るが、断面は概ねU字形を呈する。

埋積土は2層ある。1層は暗い青灰色を呈する粘質土で、大きなカーボン粒を多く含み遺物の出土も多い。1層は色調によって2分できるが1つの層として把えることができる。2層は青灰色粘質土と黒褐色土が混じり合っており、汚れて見える。遺物の出土は少ないが保存の良いものが得られる。

V G 166区付近（第10図）

最初に発見されたもので、幅50~70cmを測る素掘りの溝のはば中央部に、幅10~25cm、厚さ1cm内外の矢板が南北方向にコバを見合う形で並置されている。矢板は1線上には並ばず、土圧のためか東や西に傾いているものが多い。

埋積土は2層ある、1層は暗褐色を呈する粘質土で、カーボンの細粘を含む。総体に少しづつ感じである。2層は濁った青灰色を呈する砂質土で、1層にくらべてやや暗く粒子も粗い。

S D 271溝跡（第10図）

V G 165・166区で、矢板列のすぐ東に発見された素掘りの溝で、断面U字形を呈する。幅は上場で約40cm、深さは約20cmを測る。確認した範囲では、幾分曲りくねりながら概ね真南北方向にのびている。

埋積土は2層ある。1層は灰白色土、きわめて粒子が細かく、水を含むとヌメリがでて来、乾くと固く縮まる。2層は青褐色土と黄褐色土が混じり合っており、粘性があり、縮まりも強く、全体にカーボンの細粒を含む。土器が若干出土している。

S D 272・273・276溝跡（第10図）

V C ~ F - 165・166区で発見された溝跡で、矢板列の西側に位置する。

それぞれ付番してあるが、充分に把握できなかった。

プランを確認した時点では3本の広い溝としてえられたが、掘り下げるにつれて複雑な様相を呈し、トレーニングの北壁沿いにサブトレーニングを切って調べたが、様相を掌握するには至らなかった。

埋積土はそれぞれ2層あるが、1層はSD272からSD276までを一体にして覆っており、3者は同一時期に埋没したものであることが把えられた。1層は暗い青灰色を呈する砂質土で、比較的大きいカーボン粒を含み、遺物も多い。

SD272は、幅約50cm、深さ約20cmを測る素掘りの溝で、断面はゆるいU字形を呈する。埋積土の1層は前述のとおり、2層は淡い青褐色を呈する粘質土で、細かいカーボン粒を含む。溝の底部には木片等が遺存していた。

SD273は、土質が不明瞭で読みきれなかったため、掘り過ぎていることも考えられる。溝というよりは不整形の落ち込みの様にも思われる。断面観察の結果、埋積土の2層もSD276と続いていることが判った。

SD276は、幅約1m、深さ約30cmの素掘りの溝で、断面はSD272と同じくゆるいU字形を呈する。埋積土の2層は前述のとおりSD273と同じもので、暗く濁った青褐色で、俗にいうナマリ色を呈する。砂質に富みザラザラする。層中には木片や土器片などを多く含んでいる。

SD267溝跡（第11図）

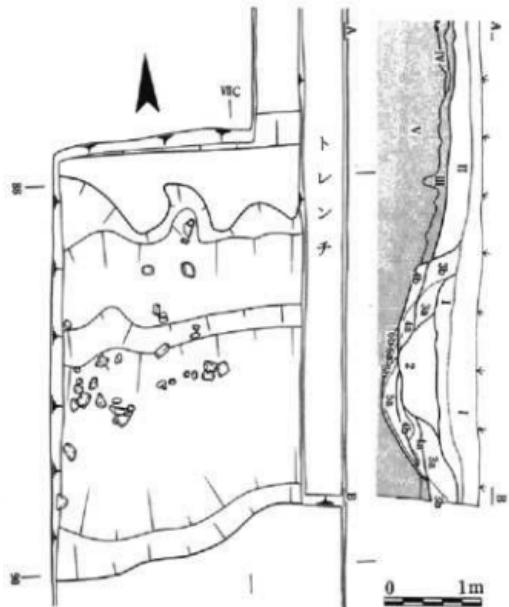
調査区の北端寄りに発見された溝跡である。

第11図の箇所以外は掘り下げを行なわず、プランを確認するにとどめた。

プランを確認した範囲では、溝の幅は概ね4m程であった。

VIB・C-87~89区を掘り下げたところ、幅は3~4m、深さは地表から最深部まで約1mを測り、およそ6時期にわたる重複が考えられた。

なお右の平面図は、度重なる降雨などにより、全掘する時間的余裕がなくなり、途中までしか掘り下げられなかつたものである。



第11図 SD267溝跡

今、溝の埋積土以外の堆積層を I ~ V 層と仮称する。I 層は現在の耕作土である。

II 層は水田の基盤層で、灰褐色を呈する粘質土である。有機物を多量に含み、摩滅した土器の小片がみられる。

III 層は、暗い灰褐色を呈する粘質土で縮りが強く、細かいカーボン粒や土器片を含む。この層の上面には土器が多く遺存し、当初遺構面=地山と考えていたが、層中の土器片の、在り方や次述の VI 層との関連からこれを整地層と考えた。

VI 層はこの地点に局的にみられる層のようである。黒褐色を呈する粘質土で、粗いカーボン粒や細かい土器片を多量に含む。この層中の土器と III 層上面の土器とは同時代のものと考えられることから、III・VI 層は近接した時期内に形成されたものと思われる。

V 層は地山である。黄褐色を呈する砂質土であるが、上部では若干これに濁りが加わっており、下部へ行くにつれて徐々にこの濁りが消えていく。

S D 267 は、断面観察の結果、およそ 6 時期にわたる重複が把えられた。

1 層は濁った灰褐色を呈する粘質土で、有機物や小さく摩滅した土器片を含む。この土質は II 層とほぼ同様であり、II 層が流れ込んだものと考えられる。

2 層は暗い灰褐色を呈する粘質土であるが、底部近くでは還元されて青味を帯びている。この層の底面からおそらくは江戸期のものと思われる近世磁器片が出土している。

3 層は a・b 2 層に分けられる。3 a 層は茶褐色を呈する粒質土で、中に摩滅の著しい土器片を若干含む。3 b 層は 1 層と似ており、これも II 層が流れ込んだものと思われる。

4 層も a・b 2 層に分けられる。4 a 層は青灰褐色を呈する粘質土で、みたところ少しクスんだ感じがする。4 b 層は淡い青灰褐色を呈する砂質土で、有機物を含む。

5 層も a・b 2 層に分かれる。5 a 層は青褐色を呈する粘質土であるが、カーボン粒を多く含むため黒味がかったみえる。断面を削っている時、この層中から土器片が若干出土した。5 b 層は青味がかった黒色を呈する粒質土で、きわめて粒子が細かいため、ヌメリがある。

6 層も同様 a・b 2 層に分かれる。6 a 層は濁った青灰色を呈し、やや粘性を帯びる。6 b 層は、色調は 5 b 層と似ているが 5 b 層より明るい感じがする砂質土である。

断面を観察すると、6 a 層と 6 b 層の境目で底面が異なった曲線を描いており、この両者は別々の溝を構成することも考えられるが、ここではひとつの溝として把えておく。

以上の各層位は、想定される 1 時期を 1 層として把えたものである。次にこれらを下から 6 層を第 1 期とし、以下順次 5 層を 2 期、4 層を 3 期とし、1 層を第 6 期の溝とする。

第 2 期の溝は出土土器から粗く平安時代のものと考えられ、III 層から切り込んでいると考えられる。

第3期の溝は、第2期の溝より広くなっているが、南岸部で第2期の溝を一部使用していると考えられることから、第2期とそれほどの時間差はないものと思われる。上場は第4期の溝に切られていて詳かではないが、おそらくは第2期の溝と同様Ⅲ層から切り込んでいるものと思われる。

第4期の溝は、第1～3期の溝と異なり、Ⅱ層から切り込んでおり、第3期の溝よりかなり広く、浅くなっている。

第5期の溝は上部を第6期の溝に切られているが、おそらく第4期と同様Ⅱ層から切り込んでいるものと思われる。第4期の溝より狭く深くなってしまっており、出土遺物から江戸時代頃のものと考えられる。

この様にみると、SD267は概ね平安時代から江戸時代以降まで長期間にわたって使用と廃棄を繰り返して来たものであることがうかがわれる。

SD267の走向方向は真東から北に概ね10度程偏っており、西側外画線と想定したSD268と対応することから、これを北側外画線と想定した。ただ、両溝は様相を異にしており、その接点は確認できなかったこともあって、両溝を直ちに結びつけることは少なからぬ疑問がある。

溝跡としてはこの他に、第6次調査で確認されたSX242性格不明大溝跡の続きと思われる、泥炭質の覆土をもつ大溝が確認された。

また、農道敷設予定地（B区）の東方（XE107区付近）で幅約60cmの溝跡（SD275）を発見したが、降雨続き等で当該地点の調査を断念したため、手元には面整理時のメモしか残っていない。しかし、位置的に妥当と考え、ここに東側外画線を想定した。

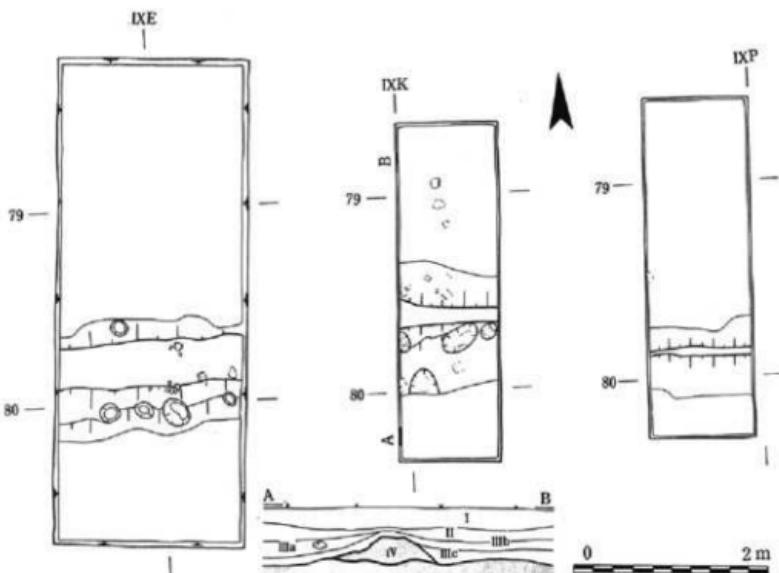
門跡と想定したSB265を一応南北と考え、ここに遺跡の一応の四至を想定することができた。想定された四至をみると、およそ東西240m、南北265mの、若干西に傾いた長方形となる。

今400尺を1町とすると、東西2町、南北は2.2町となる。東西辺と南北辺の差は25m程あり、これは施行誤差を考慮するとおよそ80尺に相当する。

この80尺によって各辺を分割してみると、東西辺は10等分、南北辺は11等分できる。

既発見の遺構群は、現在のところ80尺スパンの方眼の中にはうまく納まらないが、この80尺という数値は、この遺跡の地割りにおいて、キーワード的意味をもっている様に思われる所以である。

今後の検討に俟ちたい。



第12図 S F 274 畦状造構

S F 274 畦状造構 (第12図)

S D 267溝跡の東端部を想定してトレーニチを設定したところ、S D 267は確認できず、第12図の様な畦状の造構が発見された。

計3本のトレーニチによって確認し得たところは次のとおりである。

層序は基本的には図の様になる。I層は現在の耕土である。II層は水田の基盤層で、灰褐色を呈する粘質土である。IIIa層はS F 274の南側にのみ存在する層で、黒褐色を呈し粘質を帯びる。IIIb層は約5cmの厚さで付近一帯を覆っている。暗黒褐色を呈する粘質土で細かいカーボンや土器片を多く含む。IIIc層はIIIa層とは逆にS F 274の北側にのみ見られる。黄褐色粘質土の中に黒色土が霜降り状に散在する。この層は下につれて砂質を帯びる。

IV層は黄褐色粘質土と黒褐色土とが混在しており、この部分にしか見られない。人工により盛られたものと思われる。この部分の隆起がS F 274として認識された。V層は地山で、青灰褐色を呈する砂質土である。

各トレーニチは、S F 274の南側ではV層まで掘り下げたが、北側ではIIIc上面でとどめた。S F 274は、大きさの違いはある、基本的には概ね断面台形を呈する。

IX D 79区付近では上場幅約50cm、高さ約20cmを測り、上面には河原石や土器が遺存する。北側方面に1つ、南側方面に4つのピットが検出されたが、埋積土はIII b層と略同一であり、ピットの性格は不明である。ただ、とくに南側方面のピットは1列に並ぶ様である。

IX K 79区付近では、上場幅は15~30cm、高さおよそ25cmを測る。上面には河原石が遺存する。南側の方面には4つのピットが検出されたが、IX D 79地区と同様の様相を呈し、やはり性格は不明である。

IX O 79区付近では上場幅は約10cm、高さは約15cmを測る。

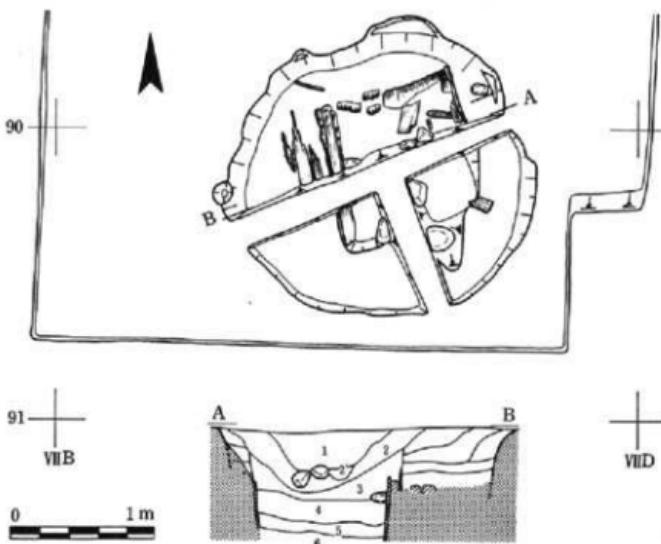
S F 274は、この様にみてくると、場所によって広くなったり狭くなったりし、走向も一線上には並ばない。南北に振れてはいるが、方向は概ね真東西に近い様に思われる。

水田の畦畔跡とも考えられるが、性格は不明である。

S E 266井戸跡（第13図）

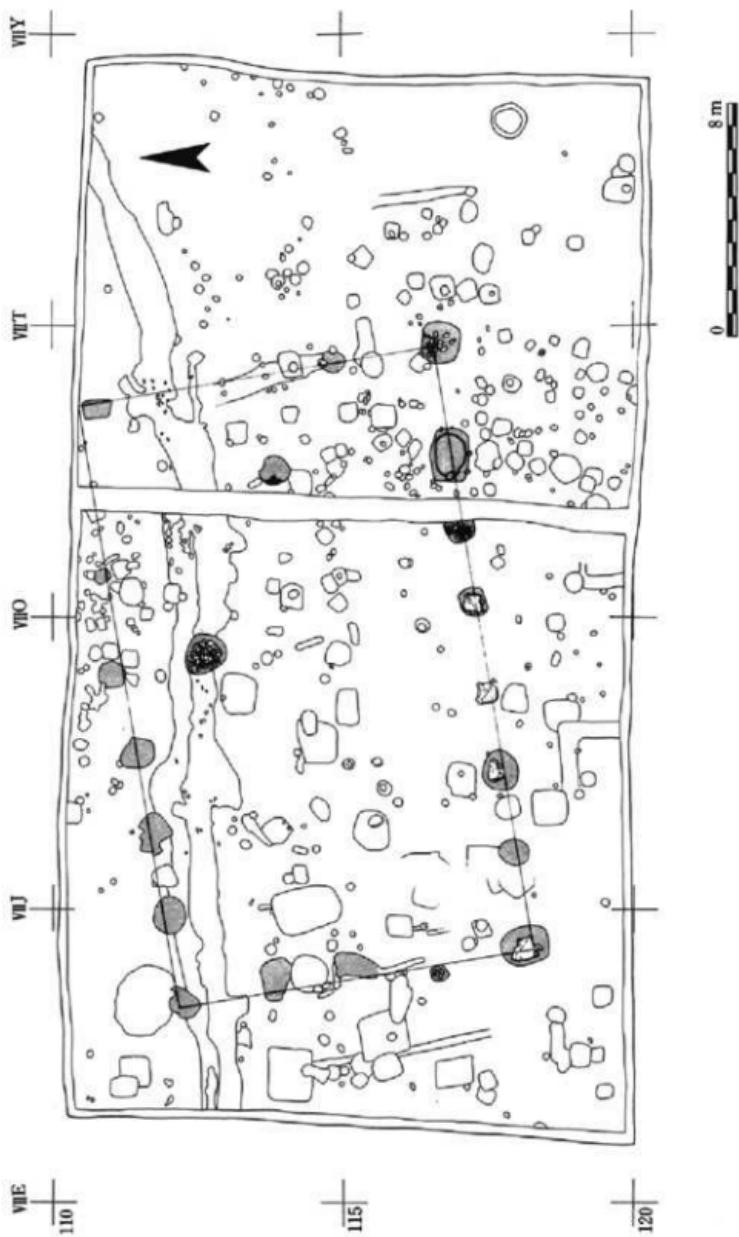
S D 267溝跡の直ぐ南で発見されたもので、当初は土塙跡と考えられており、掘り下げの過程で井戸跡と判明した。調査期間の関係で途中までしか掘り下げていない。

直径約2mを測る円形の掘り方のやや北寄りに、立板をならべて一辺約90cm（約3尺）の平面方形を呈する井戸枠を構築している。この構築方法は、本遺跡第4次調査で発見さ



第13図 S E 266井戸跡

第14図 SB270塊石遺物跡プラン断面図



れた井戸跡や、未報告であるが本遺跡の西に隣接する後田遺跡で発見された2基の井戸跡などと基本的には同一の構築方法である。

枠板は、幅5~30cm、厚さ1cm内外を測る。材質は未詳であるが、杉かとも思われる。

井戸枠の西辺には、枠板のすぐ外側に直径約15cmの丸材をころがし、そのさらに外側にも立板を並べて補強を図っている。

井戸枠を構築した後、枠板と掘り方との間には土を版築する様にして埋め戻している。埋め土は黄褐色粘質土と黒褐色土との混合層であり、両者の混合度によってその境界が識別できる。

井戸枠内の埋積土は6層ある。1層は黒褐色を呈し、土の粒子はきわめて細かい。2層は黒色を呈し、粘性をもつ。2層は茶褐色粘質土のブロックである。3層はくすんだ黒褐色土で割合締っている。4層は青味を帯びた黒褐色粘質土で、木片(自然木)や土器を含む。5層は灰黒褐色を呈し、砂質であるが粘性をもつ。5層中から保存の良い土器を得た。6層は青褐色砂質土で、目の粗い砂粒を多量に含み、ザラつく。

S B 270礎石建物跡（第14・15図）

水路敷設予定地で発見されたもので、調査期間の関係上この地区は掘り下げは行なわず、プラン確認の状況を記録するにとどめた。

礎石は南側の通りに4つ遺存し、他に根固めの栗石が3ヶ所で発見された。余は礎石や根固め石が抜き取られている。当該地区の所有者によれば、比辺りでは昔から大きな石が獣に引掛ることがあり、石を抜くのに苦労したと云う。抜いた石は以前は庭石にしていたが現今は行方不明の由。しかしこれらの抜き取り跡から概ね柱位置が推定される。抜き取り跡の土質は青味がかった黒褐色粘質土で、場所によりカーボン粒の混入度が異なる。これに対して遺存する据え方の埋土は概ね黄褐色を呈する粘質土で、多量のカーボンを含む。

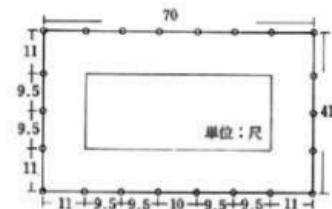
据え方は大略円形苦しくは限丸方形を呈し、径1~1.6mを測る。

遺構面には、基壇等の地業もしくはその痕跡は認められなかった。

建物は桁行7間、梁行4間の東西棟で、桁行方向は真東から北に約9.5度偏る。

柱間寸法は夫々心々で、桁行南辺西端から3.4+2.8+2.7+3.1+2.7+2.5+3.8=21m、梁行西辺北端から3.3+2.8+2.9+3.3=12.3mとなる。

当初はこれを10尺等間としていたが、この考えには無理がある



ことがわかり、後に検討の結果第15図の様な規模を想定するに至った。これによると、桁行梁行ともに両端に11尺をとり、余は9.5尺としており、桁行だけは中央に10尺の間をとっている。これから、両端の11尺を底と考え、7間4面の建物を想定し得る。

なお、建物の両辺長の比はおよそ1:1.7となり黄金矩形の比率(1:1.618)に近似する。

この地区にはこの他にもSB270に切られている溝をはじめとして、かなりの数にのぼる遺構が認められるが、現時点では未だSB270以外のまとまりを抱えていない。

ま　と　め

第8次調査では、今まで全く未知であった遺跡の四至を一応想定し得たことは大きな成果といえよう。ただこれには多くの疑問点もあり、他日解明されんことを願う。

本遺跡で初めて礎石をもつ建物跡が発見された。しかしこれは建物跡プラン確認しただけで、建物跡そのものの精査も行なっていず、周囲の状況も全く未知である。建物跡がどの様な性格をもつのか、既発見の諸遺構と時間的・空間的に如何なる関連をもつか等々、新たな問題が提起された。

今までに発見された主要な遺構の方向を調べてみると、真北乃至真東からの偏度によって凡そ5つに分類できそうである。既そ、真北に近いもの、4度内外、7度内外、10度内外、20度以上の各グループである。ここでは21例の資料によってみたが、このうち10度内外の偏りを示すものが最も多く、21例を100%とすると38.1%に達し、次が7度内外で28.6%、この両者で70%近くを占めている。余は少なく、真北に近いものと4度内外のものが、夫々9.5%、20度以上のものが14.3%となる。

一方、基壇地区では遺構の検出面によって少なくとも2つの時期が確認されており、それによると、古い時期のものが10度内外、新しい時のものが7度内外のグループに夫々納まりそうであるが、遺跡全体についてこの様な相関が認められるのか否かについては、遺物の検討を俟って行ないたい。

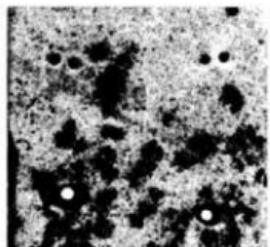
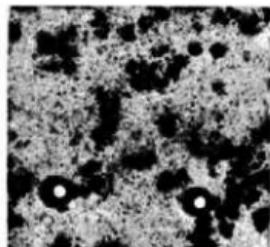
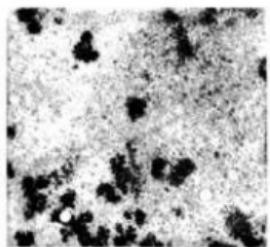
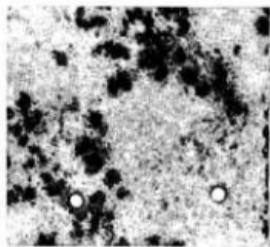
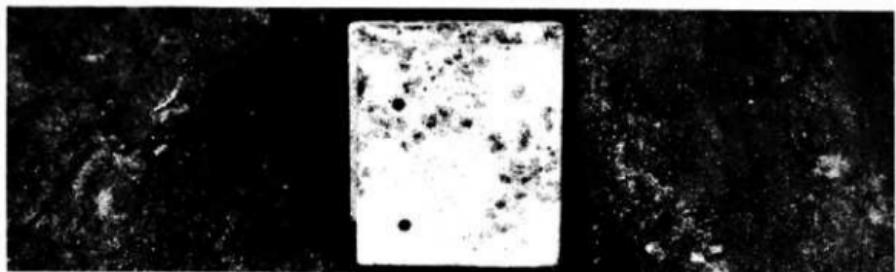
想定された四至に基づいて遺跡の地割りを検討してみたが、現在のところ何れも思わしい結果が得られていない。ただ、外画線が80尺を基準としているらしいことが考えられるので、向後この線に沿って検討してみたい。また広く条里制との関連も検討を要する。

第8次調査を以て本遺跡の調査は一応の終結をみた。遺跡の性格を確定する証左は遂に得られなかつたが、今までに検出された資料からは、律令制下における公的な施設と考えられ、更に言えば官衛跡としてよりも寺院跡としての様相を、より強くもつてゐるようと思われる。何れにしても、近隣の諸遺跡との関連や未整理遺物の検討によってどれだけのものが引き出せるかが向後の課題となろう。

図 版



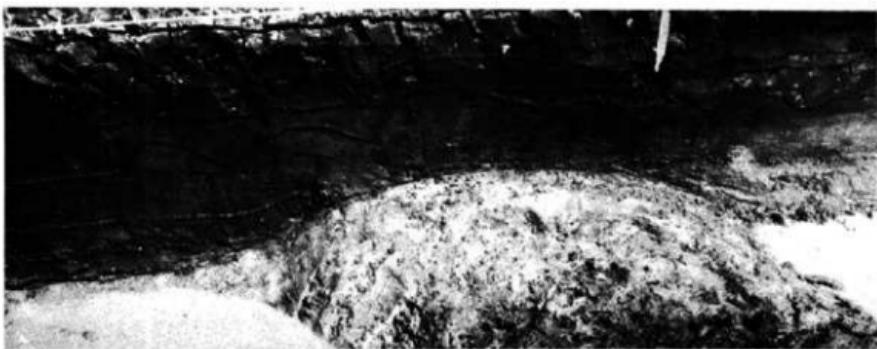
図版 1 第6次調査 出土木簡 (縮尺は約1/2.56)
(各個体右側の赤外線写真是山形県警察本部刑事部鑑識課の撮影による。)



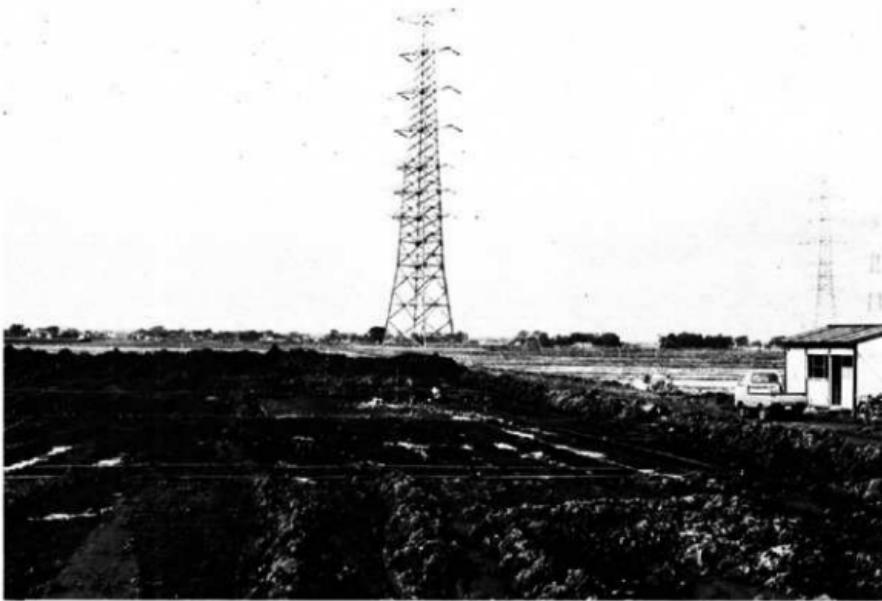
図版2

第6次調査 木籠出土状況

第8次調査 石器出土状況及出土石器 (1/0.9)



図版 3 第 6 次調査
S × 242 仕替不明大溝跡（北から）
同 大溝跡IX K ラインの土層断面（西から）



図版 4 第7次調査
北地区全景（南から）
同 （東から）



図版 5 第7次調査

北地区遺構検出状況（西から）

S-B 265根固め石遺存状況（北から）

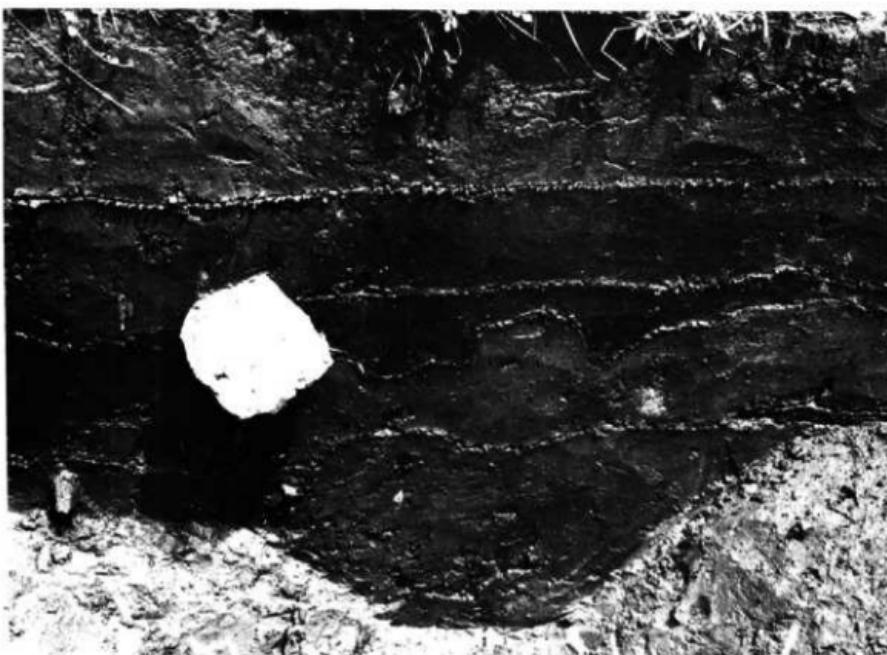


図版 6 第 8 次調査

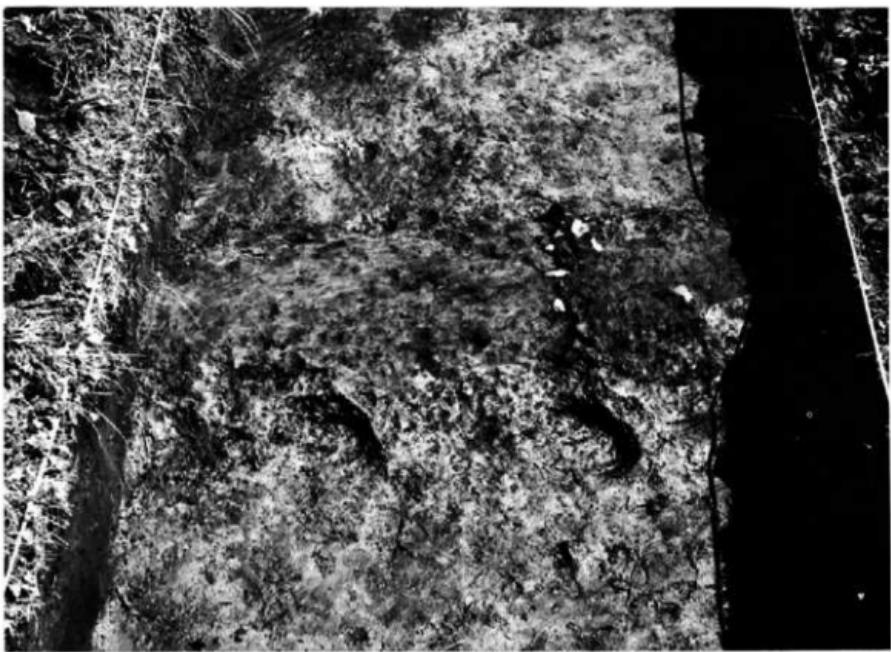
SD268・271・272・273・276溝跡、発堀前・後状況（東から）
SD268溝跡矢板遺存状況（南から）



図版 7 第 8 次調査
SD268溝跡 IV×143区付近（西から）
同溝跡北壁土層断面



図版 8 第8次調査
SD268溝跡 IVW121区付近(西から)
同溝跡、北壁土層断面



図版 9 第 8 次調査
SD268溝跡 IVU109区付近（北から）
SD274軸状遺構 IXD79区付近（南から）



図版10 第8次調査
SE 266井戸跡、SD 267溝跡（北から）
SD 267溝跡土層断面（西から）



図版11 第8次調査
SE 266井戸跡
同井戸跡発掘状況



図版12 第8次調査
S-B270 硬石建物跡地区調査状況（西から）

山形県埋蔵文化財調査報告書第30集

どう まえ 堂 の 前 遺 跡

昭和53・54年度調査略報

昭和55年3月29日 印刷

昭和55年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 (株) 大風印刷